「光に向き合う場所」

ふたりの芸術家の愛した小豆島のアトリエ

Shougo Enokura

榎倉省吾 1901－1977

洋画家。主に風景、静物を描いた。
明治34年7月15日生まれ。兵庫県出身。
昭和3年二科展に初入選,17年二科会会員となる。20年、向井潤吉らと行動美術協会を創立し、以後出品をつづけた。昭和39年アトリエを小豆島に移す。昭和52年4月30日小豆島にて75歳で逝去。号は万象堂。作品に「新緑梅樹」など。(出典:日本人名大辞典)

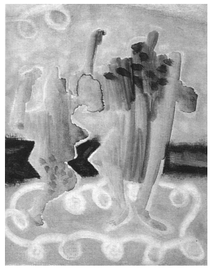
「山」　1947年(姫路市立美術館蔵)

「花」　1962年(姫路市立美術館蔵)

はじめて「梅の小屋」に榎倉康二先生を訪ねたのは、20年ほど前になります。白く輝く海を背景に、レモンがたわわに実っている情景はずっと脳裏に焼きついていました。再び「梅の小屋」を訪れたのは、一昨年前の12月。庭には、まったく変わらない風景が広がっていました。

榎倉省吾氏の作品に触れたのは最近になってのことですが、行動美術協会の創立にも関わった具象作家です。黄田 光氏が執筆された「心月輪」ー榎倉省吾伝を読むうちその一端を知りました。29歳で提唱した「新表現主義」(P96)、「森羅万象帳」という様々な自然物を克明に描いたスケッチ帳(P18)、晩年にかけて抽象性や透明感を増してきた画風と「良寛」シリーズ(P42)は、とても興味深い仕事に思われました。

心月輪―画家榎倉省吾伝
黄田 光(著)
出版社:朝日新聞社(2001/09)



「良寛和尚」1971年(個人蔵)

榎倉康二先生は、空間と物質がデリケートに触れ合いながら対立する作品を数多く発表され、国際的に評価された作家でした。白と黒がせめぎ合い、その境界がたゆたうグラデーションで構成された作品からは、深く静かな情動を感じます。コンセプトを重視し、感傷や説明的表現を排除しながらも、自らの感覚で世界を計っていく姿勢には、断固としたものがあったように思います。

お二方は、生きている時代も作品の方向性も全く違いますが、日常を自分自身に引き付けて深く洞察し、かつ感覚的に対象との距離を探ることで制作する態度は、共通するものがあると思われました。

「梅の小屋」はアトリエです。私は、二人の作家がここに関わった「記憶」が、大切な意味を持つと思いました。省吾氏がよく、画面全体を包む「光の輪」のようなものを描いているのが印象的です。また康二先生はここでは釣りをしたり考えたりして制作はあまりされなかったようですが、自分の感性のベースに「堆積された情動」「充満した静けさ」があると書いていらっしゃいます。私はここに関わるうちに、庭の向こうに見える白く輝く海から、お二方が少なからぬ影響を受けているのではないかと感じたのです。

少々オーバーな表現ですが、「梅の小屋」の場所の際立った特性は、「光に向き合う場所」であること、これが私の正直な感想です。お二方の多彩な活動、小豆島の魅力を、紙数が限られているとはいえ、とりあえず短い拙文で括る失礼をお許し下さい。

時代の流れは速く、「記憶」は加速度的に風化していきます。それでも二人の作家が関わってきた「記憶」や「体験」が、ささやかでも今後に受け継がれていくことは意味のあることだと思いました。

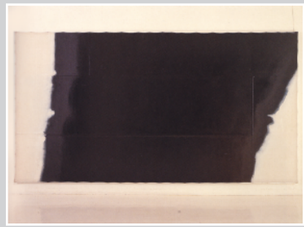
(歳森 勲)

※「光に向き合う場所」という表現は「梅の小屋」の環境から感じた自然な印象です。
故人の霊をカリスマや権威とする、宗教性は全くありません。

Kouji Enokura

榎倉康二 1942―1995

現代美術家。
東京生まれ。東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、同大学院絵画専攻修了。
1969年初個展。1971年パリ・ビエンナーレ、1978年ベネチア・ビエンナーレに出品。80年「ROSC'80」展(ダブリン)、86年バングラデシュ・ビエンナーレ(ダッカ)、92年「70年代日本の前衛」展(ボローニャ)などの国際美術展に参加し、1975年より東京芸術大学で教鞭をとる。在職中に52歳で急逝。(出典:日本大百科全書)



「Figure B-No.61」　1986年(個人蔵)

「干渉(STORY-No.41)」　1992年(個人蔵)

小豆島ってどんなところ?

小豆島(しょうどしま)は、瀬戸内海に浮かぶ香川県の島です。
素麺、醤油、佃煮、胡麻油、オリーブなどの生産が盛んで、特にオリーブは国内栽培の発祥地として広く知られています。
また壺井栄の小説『二十四の瞳』の舞台であり、島をロケ地として二度映画化されており、セットを残した映画村もあります。夏は海水浴、秋は絶景の寒霞渓など、一年を通して観光客で賑わうリゾート地です。

小豆島へのアクセス(フェリー発着港)

[香川県]	[岡山県]	[兵庫県]
高松港-土庄港	新岡山港-土庄港	姫路港-福田港
高松港-池田港	日生港-大部港	
高松港-草壁港	宇野港-土庄港	

「梅の小屋」を応援して下さる方を募集しています

皆様に「梅の小屋」のこと、榎倉省吾氏、榎倉康二氏のことを知って頂きたい、そして記憶を少しでも留めていきたい、そう思いました。
この「梅の小屋通信」もその一環で発行しておりますが、我々がここに関わり始めてからの記録を、小豆島ブログ「梅の小屋日記」にも書き残しております。妻の4コママンガと小生の拙文で、少々柔らかすぎる体裁ですが、ご覧いただけると幸いです。我々の活動に賛同し、応援をいただけるのならば、
①宜しければ小豆島ブログ「梅の小屋日記」にリンクを張って下さい。
②この「梅の小屋通信」を配布してくださる方も募集します。
③皆様の思い出やエピソードを掲載させて頂きますので、「梅の小屋通信」への寄稿も募集いたします。
④榎倉省吾氏、榎倉康二氏関係者の方に、「梅の小屋」の活動の事などお知らせいただければ幸いです。　　どうぞよろしくお願いします。

梅の小屋日記　検索

● 「梅の小屋」は私とご遺族が個人的に契約を結んでいます。東京芸術大学とは直接の関係はありませんので、他関係者の方々もお気兼ねなくお付き合いくださいませ。